

伝文

日本口承文芸学会 会報

第 75 号 2024 年 10 月 発行

日本口承文芸学会

〒464-8671 愛知県名古屋市中千種区桜が丘 23

愛知淑徳大学交流文化学部・GCC 研究科 藤井真湖研究室

Tel.: 052-781-1151 (内線 686)

E-mail: info@ko-sho.org

中国神話研究の一動向

繁原 央

中国には神話がないといわれる。それは日本の記紀のような体系だった神話が記録されていないという意味で、中国古代の文献には多くの神話的な記述がみられる。それをもとに近代において、袁珂氏などにより中国神話を復元する試みがなされてきた。ただ、伏羲女媧とか羿の射日、嫦娥奔月など有名な中国神話は、現代でも語られていたりするが、それは口承で伝承されてきたものかどうか、どうしても文献からの知識が口承化されたものではないかという疑念をもたれてしまう。

中国の民間で語られてきた口承文芸が中国全土で組織的に採集されたのは、1984 年の中国民間故事集成(歌謡と諺語の集成とあわせて三套集成という)のプロジェクトが国家事業として実施されたことからである。それまでも多くの採集報告があったが、組織的なものではない。一方、こちらは 200 万人の調査員が関与した大事業であった。その結果 27 の省と北京、天津、上海の三都市のもの、合わせて 33 冊が刊行された。

中国民間故事を集成にする前段階として、省の下の行政単位である県ごとに採集した県巻本が 4000 冊ほどまとめられていた。だが、その多くは忘れ去られそうになった。そこで中国民間文藝家協会は 2004 年県巻本 4000 冊を再度資料整理しなおして公刊しようとする壮挙にでた。中国民間故事全書の刊行である。それは 2015 年までに 159 の県巻本が知識産権出版社から出されたが、途中で終わり、その後を受けて中国民間故事叢書が 28 冊、同じ知識産権出版社から出ているが、続かなかったようだ。

これらの民間故事は神話、伝説、故事、笑話の四大分類としてまとめられている(民間故事集成の段階では笑話は故事に含まれているが、全書、叢書では独立している)。つまり中国全土から口頭伝承の神話が採集されたわけである。その中には文献から口承化されたものもあったかもしれないが、少なくとも採集段階では語り手がいて、伝承されたものと認定されたものを記録している。中でも中国の 55 の少数民族に伝わる神話は漢民族の文献と異なる伝承がうかがえるものとして、注目すべきものであった。

そのためでもあろうか、中国神話の研究が盛んになっているように思う。去年、楊利慧、張成福編著『中国神話母題索引』(陝西師範大学出版総社)が神話学文庫の一冊として刊行された。スティス・トンプソンのモチーフインデックスを元に中国の神話をモチーフ(母題)で分類したものである。その典拠をみると文献だけでなく、集成やその基になった資料本も使っている。ただ、中国全土の神話を網羅していないのが気になる。

それなら、王憲昭氏が 2018 年に中国社会科学出版社から刊行した『中国創世神話母題実例与索引』3 冊の方が、文献、集成、資料本だけでなく、神話関係の本を網羅してモチーフインデックスを作っている。しかも、こちらは「中国神話母題W編目」10 シリーズの一なので、今後も継続して刊行されるであろう。神話をモチーフに分析して分布を明らかにすることは神話の比較研究を進める契機になるに違いない。

(愛知県)

シンポジウム「植民地主義と朝鮮・韓国の口承文芸」報告

石井正己（東京都）

2024年3月3日、オンラインによって日本と韓国とつなげ、第85回研究例会を「植民地主義と朝鮮・韓国の口承文芸」をテーマに実施した。実施にあたっては、国際会議委員会の共催、韓国・龍仁大学校アジア文化研究所の後援を得た。パネリストは東京学芸大学名誉教授の石井正己（研究例会委員、本例会担当、司会兼）、龍仁大学校副教授の權赫來さん（会員外）、立教大学兼任講師の金廣植さん（会員外）で、北海道大学准教授の丹菊逸治さん（国際会議委員）、慶應義塾大学教授の熊野谷葉子さん（研究例会委員）がコメントータを務めた。日本語の予稿を用意し、崇実大学校非常勤講師・韓国研究財団学術研究教授の趙恩馥さんに通訳をお願いした。

石井は、「朝鮮の野談を書いた日本人—『朝鮮 野談・随筆・伝説』から—」と題して、まず、「植民地主義と口承文芸研究」（『口承文芸研究』第33号、2010年）を引き、植民地主義を不問に付した口承文芸研究に触れた。その後、台湾・朝鮮・南洋群島・満州・インドの昔話集を研究し、『帝国日本の刊行した説話集と教科書』（韓国・民俗苑、2019年。韓国語）を出版した。野崎充彦は『朝鮮の物語』（大修館書店、1998年）で、李朝時代の漢文の物語集として野談を位置づけたが、森川清人編『朝鮮 野談・随筆・伝説』（京城ローカル社、1944年）では、野談が民間の口碑としても伝えられている。そこで、今回は、今村軻（1870～1943）の業績を中心に朝鮮の野談を分析した。

權さんは、「朴英晩の昔話調査と『朝鮮伝来童話集』（1940年）収録童話の文芸性」と題して、1930年代に活動した伝来童話作家の朴英晩（1914～1981）の業績を取り上げた。朴は早稲田大学を中退した後、全国各地で昔話を収集し、『朝鮮伝来童話集』（漢城：學藝社、1940年。ハングル）を出版した。その後中国に亡命し、重慶臨時政府の下で軍功を立て、解放後は1960年代末までは光復軍小説を執筆している。『朝鮮伝来童話集』は初期の昔話集と評価されてきたが、完成度や形象化の水準が高く、口語体と対話体を自然に活用するなどの特徴があることを分析し、作家としての個性とともに伝来童話を書く手法を明らかにした。

金さんは、「在日朝鮮人作家、李錦玉の再話「三年とうげ」をめぐる口承性の問題」と題して、まず、櫻井美紀、大島廣志、小池淳一、野村純一などが書承を含めたメディアと関係で口承を論じたことに触れた。東アジアでは文字文化が長く営まれてきたが、韓国の口碑文学研究者や日本の口承文芸研究者の中には純粋な口承を想像・創造してきた側面が見られ、それが再話者にも大きな影響を与えていると見た。純粋な口承への想いの中で李錦玉（1929～2019）が書いた「三年とうげ」は光村図書の小学校国語教科書に1992年から今日まで収録され、日本で最も有名な朝鮮の昔話とされている。しかし、そこには誤解と誤読があることを指摘した。

後半は、参加者それぞれの立場から疑問や意見が出され、そうした議論を通して、口承文芸をとりまく歴史と現在について国際的な視野で考える必要性が共有できたかと思われる。コロナ後の学会運営を考えるにあたって、これがオンラインを利用した国際会議のモデルケースになれば幸いである。予稿は整理して、東京学芸大学から発行する報告書に収

録する予定である。

第48回日本口承文芸学会大会・報告 於 共立女子大学/ZOOM 併用

2024年6月1日（土）【公開講演】

山野千恵子氏「インド宗教における口承の機能：天啓文学と歌、そして知識の伝達」

今井秀和（東京都）

2024年6月1日（土）、共立女子大学において日本口承文芸学会第48回大会の公開講演会が開催された。今回の講演会では会員外から、蓮花寺佛教研究所の研究員である山野千恵子氏をお招きしてご講演頂いた。山野氏はインド宗教、とくに書誌に関わる研究を専門としており、本会の会員とは異なった視点から「インド宗教における口承の機能：天啓文学と歌、そして知識の伝達」と題した講演を頂戴した。

インドの書物をめぐる研究を通じて、口承文芸をめぐる問題がどのように浮かび上がってくるのかについてお話し頂いた後は、会員による新たな気づきや疑問を共有するため、フロアからの質問を踏まえた上で司会兼コメンテーター・今井から山野氏への質問時間を設けることとなった。以下、簡単ではあるが当日の講演についてまとめてみたい。

山野氏は、ヒンドゥー文化において最も重要な宗教文学であり、インド宗教の基層でもあるヴェーダの聖典に着目する。中でも特に、現在、ユネスコ無形文化遺産に登録されているリグヴェーダの讃歌が取り上げられた。リグヴェーダの賛歌は、サンスクリット語が文字で表現されるようになるはるか以前の紀元前1200年前後に編纂されたものだという。書承なしに紀元前1200年頃から現代に至るまで、特定の口承文学が残されるとは、少なくとも筆者の感覚からすると想像を絶するものがあるが、これだけの長期にわたり一言一句変わらずに情報を伝達するために用いられたのは、リグヴェーダの内容を記憶するための特別な学習方法であったという。

具体的には、バラモン学生たちは幼少期からかなり複雑な暗唱方法を繰り返し実践することにより、1028の詩編の一単語一単語を声調アクセントとともに記憶していく。そのまま内容を暗記するのではなく、一言一句変わらずに情報を覚えるために用意された高度な情報伝達システムが用いられるのである。そして逆に、書承による情報伝達であれば、リグヴェーダの讃歌はこれほどの高い精度で現在にまで受け継がれることがなかったと考えられているという。こうした点を踏まえた上で、山野氏は宗教文学の発生場や、口承の位置付けとその機能といった要素に着目し、口承文学（Oral literature）と民間文学（Folk literature）との境界の曖昧さに関する問題をも提起した。講演後はフロアを巻き込み、様々な立場からの活発な意見が交換され、会員には大きな刺激となった。

【研究発表】6月2日（日）

廣田龍平（東京都）

古野敬一氏「ネットロアの音声表現-「八尺様」を中心にした動画サイトの分析」

現代における「物語」と「声」の問題として、すでに幅広く普及していながらほとんど分析が進んでいない、インターネット上に投稿された朗読動画というジャンルがある。こ

のジャンルは、ある物語テキスト（既成のものを使うこともあれば新規もある）を読み上げた音声に、それに関連する映像や文章、BGMなどを付したもので、技術的には誰でも作ることができる。古野氏は、インターネット上では特に人気の高い怪談「八尺様」を取り扱う動画を題材として、どのような「声」が使われ、どのような工夫がなされているのかを、1000本以上の動画を分析して提示した。「八尺様」は、作中に登場する妖怪が特徴的な音声を発することもあり（効果音のような地声に加えて、「吉備津の釜」のような声真似もする）、この点などが分析においては重視された。口承文芸研究にとって興味深いのは、肉声のものよりは投稿数が少ないが、人工的に音声を合成した「機械音声」の動画が勢力を拡大しているということである。この現状は、そもそも「声」とは何かという問題の再考をうながすものであった。ただ、発表では、八尺様を語る動画が（おそらく発表時間の都合で）倍速で再生され、会場の参加者にはかなり聞き取りづらい状態になっていた。そのため「八尺様」テキストの細部を知らない場合、こういった箇所が強調されているのか分かりづらくなってしまった。実際には時間に余裕があったため、この点は惜まれる。

長見菜子氏「古代の伝承荷担者研究に関する課題と展望－語部・伶人・部曲文学の研究史を通して－」

2010年代以降の現代を取り扱う古野氏の発表内容から一転して、長氏は『古事記』や『日本書紀』といった、日本最古に属する文学作品にまつわる問題を取り上げた。しかし興味深いことに、古野氏と同じく、「誰の声が物語を伝えるのか」という問題意識を共有した研究発表でもあった。『古事記』も『日本書紀』も、ある程度は先行する文字資料があっただろうが、たとえば稗田阿礼にまつわる逸話が示すように、記紀に記録された伝承や詞章には、それらを整理し秩序づけ、そして語り継いでいく「語部」という職能者が存在していたことが想定される。また、ほかにも「伶人」や「部曲」と称される人々が同様の職能を有していたという。とはいえ、記紀研究は現存しているテキストの分析が主流であり、そのコンテキストたる「伝承荷担者」については、直接的証拠がほとんどないこともあり、十分な実態が解明されていない。長氏は断片的な記述や先行研究の綿密な検討から、現在可能なかぎりでは明らかになっていることを整理し、今後の指針を示すことを試みた。発表のレジュメは文学研究の作法に基づき、戦前から現代にいたる多くの先行研究を列挙し、それぞれに短いコメントを加えるというもので、その情報量の多さには圧倒される。また、オンライン参加の三浦佑之氏からも、わずかな史料によって全体像を描き出そうとする困難な課題に取り組む長氏の今後に対して期待が寄せられた。

坂井弘紀（神奈川県）

鳴海 あかり氏「日本人形がホラーのアイコンになるまで」

「日本人形は怖い」。現在、日本人形はそうに理解されるようだ。本来、恐怖からは遠いはずの人形がなぜ怖いものとされるようになったのか、その経緯と変遷を考察した興味深い発表である。お菊人形と髪伸びる人形の具体的な例を取り上げながら論じられた。1962年8月6日号の『女性自身』の「あっ！今の声は幽霊だった」という記事が

「お菊人形」話の初出であるが、その後の一連の逸話とは大きく内容が異なっているという。その理由は、この話の発信者である北海道の万念寺の住職がどのようにそれが受容されるかを綿密に想定して語り口を変えていったためである。「お菊人形」の説話は商業メディアによって効果的に広められ、時流にも乗って多くの人に知られるようになった。

「お菊」という名が皿屋敷伝承から借用されたことや、オカルト・ブームという時代背景があったことも見逃せない。「お菊人形」のヒットによって各地で髪伸びる人形が発見されるようになってとともに、日本人形そのものに怖いというイメージが付きまとうようになった。現代日本においては、日本人形が日常的なものではなく、誰かにとって大切な人形であるという意識が薄れていった結果、日本人形は恐怖の対象となっていくと発表者は指摘する。「お菊人形」だけが神の伸びる人形の代名詞的存在となったことや、日本人形が「過去のもの」になったことによって、「日本人形といえば怖い」という観念が形成されたのである。

山本 紗綾氏「汗を流す仏像の伝承」

地震や台風、豪雨などの災害にさいして、汗を流すことで人々に異変を告げるという伝承が付随する、阿弥陀、薬師、観音、不動などの仏像が日本各地に存在する。それらの中に「汗かき地蔵」の伝承がある。各地に伝わる「汗かき地蔵」伝承は、昔話や伝説、予兆に関する言い伝えなどさまざまな形で伝えられている。また、汗にたいする解釈も地震や旱魃、火事、戦争の前兆など多岐にわたっている。災害の種類が具体的に語られたり、異変凶変や国難が知らされたりと、変事のおよぶ範囲も多様である。こうした「汗かき地蔵」にかんしてはこれまで各地の報告が寄せられることはあったが、「汗を流す仏像」の伝承が中世以降、現代までどのように展開してきたか、「汗かき地蔵」を含む汗を流す仏像の伝承がどのように各地に広がっているかといった問題についてはこれまで明らかにされていない。この問題を考えるために、発表者は、近世までの歴史史料から人々が仏像の汗をどのように受け止めてきたかを検討し、全国の汗を流す仏像の伝承の整理・分析を行い、それら伝承の中での地蔵の位置づけを探った。また、三重県志摩市大王町波切の伝承に関する現地調査にもとづき、具体的な伝承の様相も明らかにされた。予兆や災害伝承とも深く関わる地蔵研究の進展のためにも、「汗かき地蔵」伝承の整理と分析は有用である。今後の研究のさらなる発展が期待される。

佐藤 皇太郎氏「昔話記述言語 FDL と AI 技術を用いた日本昔話の分析システムの紹介」

FDL とは Folktale Description Language（昔話記述言語）の略語である。それは、物語の構造を分析するために設計された人工言語であり、昔話を FDL に翻訳することにより、コンピュータ（プログラム）が構造や構成要素についての分析を容易にするのである。FDL ではミクロな構造にも対応できるように、原則として一つの行為を一つの文（1 行）で表される。1 話は 1 ファイルに記録される。発表者は FDL を用いて『日本の昔話』（おざわとしお再話、福音館書店）の全 301 話を翻訳した。FDL の翻訳に使用してよい単語集である「FDL 単語辞書」も編纂され、これによると物語の記述に必要な単語・記号は 2183 語であるとの結果が得られた。さらに、これらに基づいて検索システム OFDA が開発

された。この検索システムでは異なる話型間でも串刺し検索ができ、高速で的確な検索が可能になる。OFDA の検索結果のみですべてを明らかにすることは難しいが、そこから大いなるヒントを得て、本格的な調査に活かすという利用法が想定できる。現状の FDL と OFDA では、差異に注目する微分的な分析には適さないが、全体的な傾向に注目する積分的な分析には有用であり、現状のデータベースだけでも研究の進展に寄与するものと考えられる。現在の FDL と OFDA は 20 年以上の研究開発によって、当初構想していた完成形に至ったものである。今後は、FDL 翻訳の蓄積が進むことで、一層の研究発展が望まれるものである。

シンポジウム「口承文芸と視覚的表象―聴覚と視覚の接点―」

伊藤 慎吾（埼玉県）

2024 年 6 月 2 日（日）、共立女子大学において日本口承文芸学会大会シンポジウム「口承文芸と視覚的表象―聴覚と視覚の接点―」が開催された。口承文芸と隣接する表現行為や活動との関わりについて、具体的な事例を示しながら取り上げた。口承文芸が「どのようなかたちで文字言語や絵画などの視覚的表象に変換されてきたのか」、また「絵画や彫刻などの視覚的・物質的な表象は、口承といかなるかたちで結び付いてきたのか」を特に問題とするもので、次の 3 つの発表が行われた。

今井秀和「伝承とキャラクター」

大道晴香「「声」を文字化すること・視覚化すること―巫女の口寄せにおける死者の語りを例に―」

君島彩子「平和観音像と平和観音讃仰和讃」

まず今井秀和「伝承とキャラクター」は、伝承におけるキャラクター（人間や神仏、妖怪など）が、マンガや看板などの現代の大衆文化において視覚的な「キャラクター化」（キャラ化）がどのように行われるかを論じた。遠野の河童のようにキャラクター化しやすいものと、そうでないものが混在しているのではないかという問題意識から発したテーマのようである。具体的なケースとして「天狗小僧寅吉」と、それとは対照的な「生まれ変わりの勝五郎」を比較検討し、「キャラクターが前景化しがちな例」「キャラクター性よりも物語性が勝つ例」に分けられるのではないかと提唱するものであった。「キャラ立ち」とはということかを考えさせられるユニークな発表だが、キャラクター性／物語性という概念上の対立で「キャラ（kyara）」は扱えられるのかが問題となろう。「子どもたちが義経の八艘飛びの武者絵を見るときには、京都の五条の橋の上にはじまって奥州平泉のたたかいに倒れる義経一代の物語を前提としているわけで、決して、単なる一枚の絵としてだけ見ていたのではありません」という上笙一郎の言（『テレビと幼児』1969 年）を思い出す。伝承におけるキャラクターは共有される物語があるからこそその存在なのではないか。

大道晴香「「声」を文字化すること・視覚化すること」は巫女の口寄せにおける死者の語りを例に、声に基づく営為を文字もしくは視覚的に表現することについて考察したものである。文字化の事例としては近世から昭和戦後期にかけての小説や戯曲、実話本を取り上げ、視覚化の事例としては近世の戯作や近現代のマンガなどを縦横に示す。そこから憑依

の表現形式の違いを指摘し、その観点からの憑依を捉えなおす必要性があるとする。また、口寄せにおける実際の声と表象とのギャップを指摘する。最後に、声をめぐるリアリティの変化を指摘し、近代聴覚メディアがもたらした声のリアリティの変化と、語る／聴くとの関係性の問題を提起した。近世と近現代の資料を使ってリアリティを問題にし、声をめぐるリアリティがどう変化したかという点を掘り下げていこうとするものであった。その際、近世の資料は江島其碩の浮世草子、西村祐信の絵本、山東京伝の読本であった。それより古い事例として室町期成立の『花鳥風月』がある。これは花鳥と風月という巫女が光源氏や業平、末摘花といった『源氏物語』『伊勢物語』のキャラクターの霊を呼び寄せる作品で源氏供養の流れを汲むものと思われる。それとは別に、近世にはシラミの口寄せや魚・鳥の神おろしなど様々な口寄せが見られ、いずれにしても、それらは趣向として口寄せを取り入れている。このように口寄せは物語の舞台である現実世界に別世界のものを登場させる趣向としても用いられてきた。口寄せのリアリティを考えるのであれば、これらも分析対象に加える必要があるだろう。

君島彩子「平和観音像と平和観音讃仰和讃」は、第二次大戦後、戦死者の慰霊を主たる目的として建立されるようになった平和観音像をめぐる宗教的な活動の一環としての平和観音讃仰和讃と、それが歌い継がれる場を取り上げた。「平和観音讃仰歌」がNHK ラジオで発表されながらも、その一方で作られた「平和観音讃仰和讃」が各地の慰霊祭などで今なお歌い継がれている。つまり慰霊祭が当該讃仰和讃の継承に重要な場であったわけだ。そもそも伝統的な村落社会での和讃は主として講の集まりの中で歌われることが多いものの、戦後衰微し、活動が途絶えたものが多く、かろうじて和讃の近写本（明治以降の写本）が伝わるケースも多い。コロナ禍を乗り越えた講でも簡略化の傾向が見られる。「平和観音讃仰和讃」はそうしたフォークロアの和讃とは異なる文脈で新たに生まれたもので、これからの口承文芸研究の対象としても興味深い。

今回のシンポジウムでは特定のコメンテーターはおらず、上記パネリスト3名による鼎談の時間が設けられ、補足的な説明を中心に、各発表内容が深められた。いずれも前近代と現代、あるいは戦前期と戦後期といった歴史的な側面と、それを越えた側面を捉えたもので、表象文化の歴史の研究に口承文芸研究がどう関わっていくことができるか考えさせられるものとなった。

日本口承文芸学会 2024 年度研究奨励賞 表彰式

6月1日（土）の総会において、今年度の研究奨励賞の表彰式が行われた。

受賞：玉水洋匡氏

論文：「鵜沼宿と松尾芭蕉 — 「松尾芭蕉自刻句碑」を基にして—



事務局便り

○受贈書籍（2024 年 2 月～2024 年 10 月受け入れ）

- ・ 神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』第 56 巻 10 号～12 号、第 57 巻 1 号～7 号 2024 年 1 月～2024 年 10 月
- ・ 日本民俗学会『日本民俗学』第 317 号～第 319 号 2024 年 2 月、5 月、8 月
- ・ 熊本大学文学部民俗学研究室『熊民叢書 16 三ヶ浦民俗誌 せせらぎの故郷』
2024 年 3 月
- ・ 神奈川大学日本常民文化研究所『歴史と民俗』41 平凡社 2024 年 7 月
- ・ 諸塚村教育委員会・諸塚神楽記録作成調査委員会編『諸塚神楽調査報告書』
2024 年 6 月
- ・ 廣田龍平『ネット怪談の民俗学』 早川書房 2024 年 10 月

○事務局が下記に移転しました

〒464-8671 愛知県名古屋市千種区桜が丘 23
愛知淑徳大学交流文化学部・GCC 研究科 藤井真湖研究室
Tel.: 052-781-1151（内線 686）
E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会HP
(<https://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。
入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。